





日本現代文學全集・講談社版 78

林 芙美子 集
平林たい子

編	集	
伊	藤	整
龜	井 勝 一	郎
中	村 光	夫
平	野	謙
山	本 健	吉

日本現代文學全集

78

林芙美子・平林たい子集

編 集

伊 藤 整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙吉
山本健吉



昭和42年3月10日 印刷

昭和42年3月19日 發行

定 價 600圓

© KÔDANSHA 1967

著 者

はやし ふ み こ
林 芙 美 子
ひらばやし たいこ
平 林 た い 子

發 行 者 野 間 省 一

印 刷 者 北 島 織 衛

發 行 所 株 式 會 社 講 談 社

東京都文京區音羽2-12-21
電話東京(942) 1111 (大代表)
振替東京 3 9 3 0

大日本印刷株式會社
株式會社 興 陽 社
株式會社 大 進 堂
株式會社 岡 山 紙 器 社
株式會社 第一紙藝社
株式會社 石 井
日本クロス工業株式會社
日本加工製紙株式會社
本州製紙株式會社
安倍川工業株式會社
三菱製紙株式會社
神崎製紙株式會社

印刷製本
寫真製函
版印本
製製
背革
表紙クロス
繪用紙
本文用紙
函貼用紙
見像し用紙
扉用紙

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

林 芙美子集 目次

蒼馬を見たり……………五
放浪記……………二〇
十字星……………二七
パレルモの雪……………三七
風琴と魚の町……………四〇
清貧の書……………四三
晩菊……………四七

筆 蹟
 卷頭寫眞

め し……………一三

作品解説……………小田切秀雄 四一六
林芙美子入門……………和田芳惠 四三四
年 譜……………四三二
参考文献……………四四五

平林たい子集 目次

巻頭寫眞

筆 蹟

嘲 る……………	三三
施療室にて……………	三九
殴 る……………	四九
森の中……………	六〇
敷設列車……………	七一
悲しき愛情……………	八五
その人と妻……………	一〇〇

エルドラド明るし……………	三二
---------------	----

一人行く……………	三九
-----------	----

盲中國兵……………	三三
-----------	----

かういふ女……………	三九
------------	----

鬼子母神……………	七七
-----------	----

人生實驗……………	八三
-----------	----

結 婚……………	九九
----------	----

作品解説……………	小田切秀雄 四二
-----------	----------

平林たい子入門……………	和田芳惠 四六
--------------	---------

年 譜……………	四七
----------	----

参考文献……………	四六
-----------	----

林
芙美子集

めし

木本
笑美子

遊
覧
バス
ー

結婚は、じていうものでもあるし、じりい
で、海もなう、じなくてい、い、ものだね、

初^{はつ}之^の輔^{すけ}が
去^いつた。

その初之輔は、いつも、神色自若を自慢に
してゐるのだが、この、遊覧バスに乗ると同

蒼馬を見たり

序

芙美子さん

大空を飛んで行く鳥に足跡などはありません。淋しい姿かも知れないが、私はその一羽の小鳥を譚もなく讚美する。

同じ大空を翔けて行くやつでも、人間の造つた飛行機は臭い煙を尻尾の様に引いて行く。技巧はどうしても臭氣を免れません。

大きくても、小さくても、賑やかでも、淋しくても、自然を行く姿には眞實の美がある。魂のビブラシオンが其儘現はれる。それが人を引きつけます。それが人の心をそそります。

それです。私は芙美子さんの詩にそれを見出し、感激してゐるのです。文藝といふものに縁の遠い私は、詩といふものを餘り讀んだことがありません。その私が、何時でも、貴女の書かれたものに接する度に、貪る様に讀みふけるのです。

私は文藝としての貴女の詩を批評する資格はありません。また其様な大それた考を持ち合せて居りません。けれども愛讀者の一人として私の感激を書かして頂くのです。

芙美子さん、

貴女はまだ若いのに随分深刻な様々な苦勞をなされた。けれども貴女の魂は、荒海に轉げ落ちても、砂漠に踏み迷つても、何時でも、お母さんから頂いた健やかな姿に蘇へつて来た。長い放浪生活をして来た私は血のにじんでゐる貴女の魂の歴史がしみじみと讀める心地が致します。

貴女の詩には、血の涙が滴つてゐる。反抗の火が燃えてゐる。結水を割つた様な鋭い冷笑が響いてゐる。然もそれが、虚無に啼く小鳥の聲の様に、やるせない哀調をさへ帯びてゐる。

芙美子さん

私は貴女の詩に於て、ミユツセの描いた巴里の可愛い娘子を思ひ出す。そのフランシな心持、わだかまりの無い氣分！ 私は貴女の詩をあのカルチエ・ラタンの小さなカフェの詩人達の集りに讀み聞かせてやりたい。

だがね芙美子さん、貴女の唄ふべき世界はまだ無限に廣い。その世界に觸れる貴女の魂のビブラシオンは是れから無限の深さと、無限の綾をなして發展しなければなりません。これからです。どうか世間の事なぞ顧みないで、貴女自身の魂を育くむことに精進して下さい。それは、どんな偉い人でも、貴女以外の誰にも代ることの出来ない貴女一人の神聖な使命です。

昭和四年三月十六日夜

石川三四郎

序

芙美子さん——

しばらく留守にしてゐたので返事が遅れてすみません。歸つてから十日餘りになるのです。身體

はさしてゐると云ふわけではないが、頭が癡癡してゐるやうなのです。

序文は勿論喜んで書きます。しかし別段改まつて書く事もありません。

あなたが先づニセ物の詩人でないと云ふことがなにより先きに感じられるのです。

あなたは詩を、からだ全體で書いてゐます。かう云つたらもうそれ以上のことは云はないでもいゝのかもわかりません。

あなたにはかなりな獨創性があります。眞似をしたところが見えません。それに情熱と明るさがあつて、キビキビしたところがあります。

それ故あなたが特に女性だと云ふやうなことは私の頭には映じて来ないのです。

あなたの詩には少しもこせつしたところがなく、女らしいヒガミもなく、貧乏でも潑刺としてゐるところがある。

色々綺麗な言葉と並べてもなんの感じも受けない詩があります。凄い文句や、恐ろしい言葉を連發しても少しも凄くも恐ろしくもない詩もあります。

詩人は生れる——と云ふのはふるい言葉ですが、ほんとうです。すべて藝術はなによりも天分が問題です。努力は勿論、人間の仕事には付きものです。しかし、藝術の場合ではその努力と云ふものが駄目には終る場合が随分と、多いのです。すぐれた天分のない人間の藝術いぢり程みじめな物は凡そないやうです。

他人の批評ばかりを氣にかけたり問題にしたりして、自分の作品に酔ふことも出来ず、ひとりそれを味ひ楽しみ得ることの出来ない人間は藝術家でも何でもないのでせう。

自分の作品がどんなものであるかは自分が一番よく知つてゐる筈です。

私は昔から自分の書いた物を一度も人に見せたり、讀んでもらつたりした経験がありません。他人の尺度と云ふものが、如何なる場合にも自分の尺度にならぬことを自分が信じてゐるからです。

勿論他人の作品の場合でも人がほめたからその作品に感服するのではなく、自分が感服したから、感服してゐるまでの話です。

私も來年からは少し自分を靜かにいたはる生活をしたいと思つてゐます。

私は又この三十一日に旅へ出ます——あなたの詩集の出る頃までに歸るかも知れません。では御自愛專一に願ひます。

大正十四年十二月二十九日

辻 潤

自序

あゝ二十五の女心の痛みかな！

細々と海の色透きて見ゆる

黍畑に立ちたり二十五の女は

玉蜀黍よ玉蜀黍！

かくばかり胸の痛むかな

廿五の女は海を眺めて

只呆然となり果てぬ。

一ツ二ツ三ツ四ツ

玉蜀黍の粒々は二十五の女の

佗しくも物ほしげなる片言なり

蒼い海風も

黄いろなる黍畑の風も

黒い土の吐息も

二十五の女心を濡らすかな。

海ぞひの黍畑に

何の願ひぞも

固き葉の颯々と吹き荒れて

二十五の女は

眞實命を切りたき思ひなり

眞實死にたき思ひなり。

延びあがり延びあがりたる

玉蜀黍は儚なや實が一ツ

こゝまでたどりつきたる

二十五の女の心は

眞實男はいらぬもの

そは悲しくむつかしき玩具ゆゑ

眞實世帯に疲れる時

生きようか死なうか

さても佗しきあきらめかや

眞實友はなつかしけれど

一人一人の心故——

黍の葉のみんな氣ぜはしい

やけなそぶりよ

二十五の女心は

一切を捨て走りたき思ひなり

片瞳をつむり

片瞳を開らき

あゝ術もなし

男も欲しや旅もなつかし。

あゝもせよう

かうもせよう

をだまきの糸つれづれに

二十五の呆然と生き果てし女は

黍畑のあぜくろに寝ころび

いつそ深くと眠りたき思ひなり。

あゝかくばかり

せんもなき

二十五の女心の迷ひかな。

——一九二八、九——

蒼馬を見たり

蒼馬を見たり

古里の厩は遠く去つた

花が皆ひらいた月夜

港まで走りつゞけた私であつた

朧な月の光りと赤い放浪記よ

首にぐるぐる白い首巻きをまいて

汽船を戀ひした私だつた。

だけれど……

腕の痛む留置場の窓に

遠い古里の蒼い馬を見た私は

父よ

母よ

元氣で生きて下さいと呼ぶ。

忘れかけた風景の中に

しほしほとして歩ゆむ

一匹の蒼馬よ！

おゝ私の視野から

今はあんなにも小さく消えかけた

蒼馬よ！

古里の厩は遠く去つた

そして今は

父の顔

母の顔が

まさまぎと浮かんで来る

やつぱり私を愛してくれたのは

古里の風景の中に

細々と生きてゐる老いたる父母と

古ぼけた厩の

老いた蒼馬だつた。

めまぐるしい騒音よみな去れつ！

生長のない廢屋を圍む樹を縫つて

蒼馬と遊ぼうか！

豊かなノスタルヂヤの中に

馬鹿！ 馬鹿！ 馬鹿！

私は留置場の窓に

遠い厩の匂ひをかいた。

赤いマリ

私は野原へはふり出された赤いマリだ！

力強い風が吹けば

大空高く

鷲の如く飛び上る。

おゝ風よ叩け！

燃えるやうな空氣をはらんで

おゝ風よ早く

赤いマリの私を叩いてくれ。

ランタンの蔭

キングオブキングを十杯吞ませてくれたら

私は貴方に接吻を一ツ上げませう

おゝ哀れな給仕女

青い窓の外は雨のキリコダマ

さあ街も人間も××××も

ランタンの灯の下で

みんな酒になつてしまつた。

カクメイとは北方に吹く風か……

酒をぶちまけてしまつたんです

テーブルの酒の上に眞紅な口を開いて

火を吐いたのです。

青いエプロンで舞ひませうか

金婚式！ それともキヤラバン……

今晚の舞踊曲は——

さあまだあと三杯

しつかりしてゐるかつて

えゝ大丈夫よ。

私はおりこうな人なのに

ほんとにおりこうな人なのに

私は私の氣持ちを

つまらない豚のやうな男達へ

をしげもなく切り花のやうに

ふりまいてゐるんです。

カクメイとは北方に吹く風か……

お釋迦様

私はお釋迦様に戀をしました

仄かに冷たい唇に接吻すれば

おゝもつたいない程の

痺れ心になりまする。

ピンからキリまで
もつたいなさ

なだらかな血潮が逆流しまする
蓮華に座した
心にくいまで落付きはらつた

その男ぶりに
すつかり私の魂はつられてしまひました。

お釋迦様

あんまりつれないではござりませぬか！

蜂の巢のやうにこはれた
私の心臓の中に

お釋迦様

ナムアマミダブツの無情を悟すのが
能でもありませんまいに

その男ぶりで炎の様な私の胸に
飛びこんで下さりませ

俗世に汚れた

この女の首を
死ぬ程抱き締めて下さりませ。

ナムアマミダブツの

お釋迦様！

歸郷

古里の山や海を眺めて泣く私です
久々に訪れた古里の家

昔々子供の飯事に

私のオムコサンになつた子供は
小さな村いづばいにツチの音をたて、
大きな風呂桶にタガを入れてゐる
もう大木のやうな若者だ。

崩れた土橋の上で

小指をつないだかのひとは

誰も知らない國へ行つてゐるつてことだが。

小高い蜜柑山の上から海を眺めて

オーイと呼んでみようか

村の人が村のお友達が
みんなオーイと集つて来るでせう。

苦しい唄

隣人とか

肉親とか

戀人とか

それが何であらう——

生活の中の食ふと言ふ事が満足でなかつた
ら

描いた愛らしい花はしぼんでしまふ

快活に働きたいものだと思つても

悪口雑言の中に

私はいぢらしい程小さくしゃがんでゐる。

両手を高くさし上げてみろが

こんなにも可愛い女を裏切つて行く人間は

かりなのかい

いつまでも人形を抱いて沈黙つてゐる私で
はない。

お腹がすいても

職がなくつても

ウヲオ！ と叫んではならないんですよ

幸福な方が眉をおひそめになる。

血をふいて悶死したつて

ビクともする大地ではないんです

後から後から

彼等は健康な砲丸を用意してゐる。

陳列箱に

ふかしたてのパンがあるが

私の知らない世間は何とまあ

ピヤノのやうに軽やかに美しいのでせう。

そこで始めて

神様コンチクショウと吐鳴りたくなります。

疲れた心

その夜——

カフェーのテーブルの上に

盛花のやうな顔が泣いた

何のその

樹の上にカラスが鳴かうとて

夜は辛い——
両手に盛られた
わたしの顔は
みどり色のお白粉に疲れ
十二時の針をひつばつてゐた。

鯛を買ふ

鯛を買ふ

——たいさんに贈る——

一種のゴオフンは私達には薬かも知れない。

二人は幼稚園の子供のやうに
足並そろへて街の片隅を歩いてゐた

同じやうな運命を持つた女が
同じやうに瞳と瞳をみあはせて淋しく笑つ
たのです

なにくそ!

笑へ! 笑へ! 笑へ!

たつた二人の女が笑つたつて
つれない世間に遠慮は無用だ。
私達も街の人達に負けないで
國へのお歳暮をしませう。

鯛はいゝな

甘い匂ひが嬉しいのです
私の古里は遠い四國の海邊
そこには

父もあり

母もあり

家も垣根も井戸も樹木も……

ねえ小僧さん!

お江戸日本橋のマークのはいつた

大きな廣告を張つておくれ

嬉しさをもたない父母が

どんなに喜こんで遠い近所に吹ちやうして
歩く事でせう

娘があなた、お江戸の日本橋から買つて
送つて下れましたが、まあ一ツお上りな
してハイ……

信州の山深い古里を持つ
かの女も

茶色のマントをふくらませ

いつもの白い齒で叫んだのです。

——明日は明日の風が吹くから、ありつたけ
のせいで買つて送りませう……

小僧さんの持つた木箱には
さつまあげ、鮭のごまふり、鯛の飴干し

二人は同じやうな笑ひを感受しあつて
日本橋に立ちました。

日本橋! 日本橋

日本橋はよいところ

白い鷗が飛んでゐた。

二人はなぜか淋しく手を握りあつて歩いた
のです

ガラスのやうに固い空氣なんて突き破つて
行かう

二人はどん底を唄ひながら

氣ぜはしい街ではじけるやうに笑ひました。

馬鹿を言ひたい

——古里の両親に——

千も萬も馬鹿を言ひたい……

千も萬も馬鹿を吐鳴りたい……

只何とはなしに……

こんなにも元氣な親子三人があつて

一升の米の買へる日を數へるのは

何と云ふ切ない生きかただらう。

果然と生きて來たのではないが

働き馬のやうに朝から晩まで

四足をつまばつて

がむしやらに

食べたい爲に

只果然と生きて來てしまつた!

親子三人そろつて

せめて

千も萬も 千も萬も

馬鹿を吐鳴つたらゆくわいだらう。

酔醒

なつかしい世界よ！

わたしは今酔つてゐるんです。

下宿の壁はセンベイのやうに青くて

わたしの財布に三十銭はいつてゐる。

雨が降るから下駄を取りに行かう

私を酔はせてあの人は

何も言はないから愛して下さいと云ふから

何も言はないで愛してゐるのに

悲しい……

明日の夜は結婚バイカイ所へ行つて

男をみつませう——

わたしの下宿料は三十五圓よ

あゝ狂人になりさうなの

一月せつせと働いても

海鼠のやうに私の主人はインケンなんです。

煙草を吸ふやうな気持ちで接吻でもしてみ

たい

戀人なんていらぬの

たつた一月でいゝから

平和に白い御飯がたべたいね

わたしの母さんはレウマチで

わたしはチカメだけど

酒は頭に悪いのよ——

五十銭づつ母さんへ送つてみたけど

今はその男とも別れて

私は目がまひさうなんです

五十銭と三十五圓——

天から降つてこないかなあ——

戀は胸三寸のうち

處女何と遠い思ひ出であらう……

男の情を知りつくして

この汚らはしい靜脈に蛙が泳いでゐる。

こんなに廣い原つばがあるが

貴方は眞實の花をどこに咲かせると云ふの

です

きまぐれ娘はいつも飛行機を見てゐますよ

眞實のない男と女が千萬人よつたつて

戦争は當分お休みですわ。

七面鳥と狸！

何だい！ 地球飛んちまへ

眞實と眞實の火花をよう散らさない男と女

は

パンパンとまつぶたつに割れつちまへ！

女王様のおかへり

男とも別れだ！

私の胸で子供達が赤い旗を振る

そんなによろこんでくれるか

もう私はどこへも行かず

皆と旗を振つて暮らさう。

皆さうして飛びだしてくれ！

さうして石を運んでくれ

そして私を胸上げして

石の城の上にのせてくれ。

さあ男とも別れだ泣かないぞ！

しつかり しつかり

旗を振つてくれ

貧乏な女王様のお歸りだ。

生贖取り

雞の生贖に火花が散つて夜が来た

東西！

東西！

そろそろ男との大詰が近かづいて来た

一刀兩断にたちわつた

男の腸に

メダカがピンピン泳いでゐる。

くさい くさい夜だ

誰も居なければ泥棒にはいりませうぞ！

私はピンボウ故

男も逃げて行きました

まつくらしい頬かむりの夜だ。

一人旅

風が鳴る白い空だ

冬のステキに冷い海だ

狂人だつてキリキリ舞ひをして

目の覚めさうな大海原だ

四國まで一本筋の航路だ

毛布が二十銭お菓子が十銭

二等客室はくたびりかけたどぜう鍋のやう

に

ものすごいフツトウだ

しぶきだ

雨のやうなしぶきだ

みはるかす白い空を眺め

十一銭在中の財布を握つてゐた。

あゝバツトでも吸ひたい

ウヲオー と叫んでも

風が吹き消して行くよ

白い大空に

私に酔を吞ませた男の顔が

あんなに大きく あんなに大きく

あゝやつぱり淋しい一人旅だ。

善魔と悪魔

まあ兎に角貴方との邂逅を祝しませう

— 淋しい人生ぢやありませんか

全く生きてゐる事が

イリウジヨンではないかと思ふ事さへあり

ますよ

或ひはさうかも知れないけれど

此頃つくづく性慾から離れた

心臓が機關車になるやうな

戀がしてみたいと思ひます。

性慾アナーキズム

貞操共産主義も鼻について來ましたからね

やつぱり私の心臓の中にも

善魔があるんですね。

— 驚きましたね

悪魔が私を裸踊りさせるやうに

善魔は私をおだてあげるのです。

まつて下さい！

今に人間生死薬を發明するつもりです

全くいつも思ふ事です

廣い海の上をひとつばしり

歩ける機械が欲しいですね

— まあゆつくり話しませう

まだ生きてゐるんでせう……

貴方も私もまだ二三十年あるんです。

小さな地球の上ではからずも

貴方と邂逅したことは

因果を説かなくても當然の事です

人間萬事タナカラボタモチ主義

思へば數へ切れない程の主義がありますね

それも皆善魔と悪魔の戦ひです。

結局は大口いつばいの空です

どうです十本入り六銭の

蒼ざめたバツトでも吸ひません

そして愉快に

笑つて今日の邂逅を祝しませう。

灰の中の小人

今日も日暮れだ

灰白い薄暗の中で

火鉢の灰を見つめてゐたら

凸凹の灰の上を

小人がケシ粒のやうな荷物をもつて

ヒヨコヒヨコ歩いてゐる。

―姉さんくよくよするもんぢやないよ
貧しき者は幸なりつてねへッへッ
あゝ疲れた

私はあんまり淋しくて泣けて來た
ポタポタ大粒の涙が灰に落ちると
小人はジュンジュン消えていつてしまつた。

秋のこゝろ

秋の空や
樹や空氣や木は
山の肌のやうに冷く清らかだ。

女のやうにうるんだ夜空は
たまらなくいゝな

朝の空も
夜の空も
秋はいゝな。

青い薬ビンの中に
朱いランタンの灯が
フラリフラリ
ステツキを振つて歩く街の戀人達は
古いマツチのからに入れて
私は少女のやうにクルリクルリ
黄色い木綿糸を巻きませう。

夜明近くの森の色や鳥の聲を見たり聞いた
りすると

私のこゝろが眞紅に破けさうだ
夜更けの田舎道を歩いて
虫の聲を聞くと
切なかつた戀心が鹽つばい涙となつて
風に吹かれる

秋はいゝな
朝も夜も
私の命がレールのやうにのびて行きます。

接吻

はじめて接吻を知つた夜
櫻がランマンと咲いて

月は赤かつた――

血をすゝるやうな男の唇に
わけても
わけても
月はくるくる舞つてゐた。

ロマンチストの言葉

―これでもかー
―まだまだ……

―これでもへこたれないか！
―まだまだ……

貧乏神がうなつて私の肩を叩いてゐる
そこで笑つて私は質屋の門へ
『弱き者よ汝の名は女なり』と大書した。

ほがらかなる風景

出帆だ！ と吐唸つてゐるやうな百貨店の
口
その口つべたにツバを吐いて
小石のやうに私を蹴つた
ふそろひな流行の旗を立て澤山の不幸人が
行くよ。

暮色に包まれた街の音に押されると
私は郊外の白い御飯を思ふ。

艶々とした健康な住家を思ひ浮べると
空高く口笛を吹いて銅貨の音が戀しくなつ
た

だが過失の卵ばかり生んでゐる
私はメン雑だと思ふと泣けてしまふ。

だがその小さな汚れた卵はメリケン袋へ入
れて

ほら百貨店の口へ
群集の頭へはふり投げてやらう。

くるりと廻轉機をまはして私は風のやうに
爽やかに郊外の花畑を吹く。

眞實生る樂しみは

嘘を言はないで毎日白い御飯が食べられる
ことだ

ところで美美子さんは幸福なんだよ
と誰かに一ツ呼びかけてやりたいね。

いとしのカチウシヤ

いとしのカチウシヤ

1

ぐいぐい陽向葵の花は延びて行つた

油陽照りの八月だ!

鼠色の風呂敷を背負つて

私は何度あの隧道を越えたらう。

その頃

釜の底のやうな直方の町に

可愛やかチウシヤの唄が流行つて來た

炭坑の坑夫達や

トロツコを押す女房連まで
可憐な此唄を愛してゐた。

2

私は固い玉葱のやうに元氣だつた

月の出かけた山脈を脊に

せめて淡雪とけぬまに……

炭坑から町までは小一里の道のりだ。

鯉の繪や富士山の繪の一本拾錢の白い扇子

は

毎日々々私の根氣と平行して賣れて行つた

破船のやうな青いペンキ塗りの社宅を越す

と

千軒長屋の汚ない坑夫部屋が芋虫のやうに

並んでゐて

お上さん達は皆私を待つてゐてくれた。

3

晝食時になると

炭坑いつばいに銅鑼が鳴り響いて

待ちかまへてゐたやうに

土の中からまるで石ころのやうな人間が飛

び出して來る

『オーイ! カチウシヤ飯にしろい!』

陽向葵はどんな荒れた土の上にも咲いてゐ

た

自由な空氣をいつばい吸つた坑夫達は

飯を頬ばつたり

女房の鼻をつまんだりして
キビキビした笑ひを投げあつてゐる
油陽照りの八月だ!

4

直方の町は海鼠のやうに佗しい。

飯をしまつて石油を買ひに出ると

解放された夜の微風が

海月のやうなお月さんをかすめてゐる。

坑夫相手の淫賣屋の行燈も

貝のやうに白々とさえて來る。

私の義父や母は

町や村を幾つも幾つも越して

陶器製造所や下駄工場へ

荷車を引いて行商に行つてゐた。

待ち佗びて道へ立つてゐると

輕さうな荷車を引いた義父の提灯が見える

すると私は犬のやうに走つて

車を押ししてゐる母へすがりついた。

5

雨が何日も降り續くと

暑苦しい木質宿の二階で

永住の地を私達親子はどんなに戀しがつた

事だらう。

町へ出るど

雪が降つてゐる停車場で
汽車の窓を叩いてゐる可憐な異人娘の看板
を見た、

その頃の私の雜記帳は
どの頁もカチウシヤの顔でいつばいだつた。

6

『今日は事務所をぶつこはしに行くんだ。』
或日

口笛を吹き鳴らし吹き鳴らし炭坑へ行くと
あんなに静かだつた坑夫部屋の窓々が
皆殺氣立つて

糸巻きのやうに空つばのトロツコがレール
に浮いてゐた。

重たい荷を脊負つて隧道を越すと
頬かぶりをした坑夫達が

『おいーカチウシヤ早く歸らねえとあぶ
ねえぞー』

私は十二の少女
カチウシヤと云はれた事は

お姫様と言はれた事より嬉しかつた
『あ、ん、ん、しつかりやつておくれつ！』

7

純情な少女には

あの直情で明るく自由な坑夫達の顔から
正義の微笑を見逃しはしなかつた。

木賃宿へ歸つた私は
髪を二ツに分けてカチウシヤの髪を結んで

みた。
いとこのカチウシヤよ！

農奴の娘カチウシヤはあんなに不幸になつ
てしまつた。

吹雪、シベリヤ、監獄、火酒、ネフリユウ
ドブ

だが何も知らない貧しい少女だつた私は
洋々たる望を抱いて野菜箱の玉葱のやうに
くりくり大きくそだつて行つた。

海の見えない街

凍つた空に響くのは

固い銅鑼の音だ
街路樹が冬になると

人間の胃袋が汚れて来る。
すりきれた

すりきれた
都會の奈落にひしめきあふロボット
ロボットの足につないだブラチナの鎖は

金にあかした電流だ。

波の音が未來も過去もない荒んだ都會のセ
メントをサザサと崩す日を思へ！
大理石もドームも打破つてトンネルを造れ

海へ續くユカイなトンネルを造れ
海は波は

新しい芝居のやうに泡をたて

腰をゆり肩を怒らせ
胸を張り
眞實切ないものを空へぶちまけてゐる。

汚れた土を崩す事は氣休めではない
大きい冷い屋根を引つべがへして
浪の泡沫をふりかけようか！

それとも長い暗いトンネルの中へ
鎖の鍵を持つてゐるムカデを
トコロテンのやうに押し込んでやらうか！

奈落にひしめきあふ不幸な電氣人形よ
波を叩いて飛ぶ荒鷲のツバサを見よ
海よ海！

海には自由で輕快な帆船がいつばいだ。

情人

船の上から

一直線に飛びこんだ私——
上手に起きようとする

ふくらはぎに海鼠が這つて
私は恥かしくて

両手で乳房を抱きました。

波が荒くなつてくる

私は髪をぼどいて
もうステパチになつたんです
ドンと突き當れば